

学位請求論文要旨

親鸞の救済論

一楽真

本論文は、親鸞が『教行信証』において人間の救済をどのように論じているかを明らかにすることを主題としている。

仏教は人間の苦悩を見つめ、それからの解放を説いてきた。特に大乘仏教は関係を生きる人間の現実を見据え、自利利他の課題を掲げてきた。ただ、自利利他の成就是甚だ難しく、どのようにすれば実現するのかという具体的な問題を抱えてきた。親鸞はその問題にぶつかる中で、改めて浄土の仏道に出遇った人である。修行による覚りを目指してきた仏教からすると、阿弥陀如来の本願によって救済される道は安易に見えるかもしれない。しかし、どれほど緻密な教理が立てられても、その通りに歩みを進めることのできない人間の問題が横たわっている。その人間の問題を踏まえて、親鸞は誰の上にも成り立つ真実の仏道として浄土を掲げていくのである。

本論では、親鸞が出遇った浄土の仏道の必然性と、浄土において語られる人間の救済について、親鸞の主著である『教行信証』を中心に尋ねた。初めに、親鸞が『教行信証』を書かなければならなかった理由について考察した。次に、『教行信証』において浄土の仏道が掲げられる意義と、親鸞が語る如来の本願によって成り立つ仏道¹がいかなる内容をもっているかを考察した。その際、如来の本願のはたらきを二種廻向として押さえるところに、何が示されているかに注意した。その上で、人間の上に具体的に何が起こるかという点を中心にして親鸞の語る救済について考察した。

第一章「浄土真宗開顕―浄土の救い―」では、親鸞自身がどのように浄土真宗と出遇い、生きたのかということを生涯に沿いながら簡単に述べた。その上で、旧仏教からの専修念仏弾圧を受けて、『教行信証』を撰述していく課題について考察した。漢文を用い、しかも膨大な経論釈を引用する「文類」という形を取って表していくのは、当時の仏教界および思想界に訴えかけていくのみならず、後世にまで伝えていく願いがあったことを述べた。

第二章「救済の事実―顕真実教の明証―」では、「教巻」を取り上げ、阿難が釈尊に改めて出遇ったことの意味を考察した。阿難は多聞第一と称される常随昵近の弟子である。ただ、長年にわたり釈尊の教えに接しながらも、

仏意には出遇えていなかった。仏意との出遇い、ここに救済の事実がある。それは、人間の狭く浅い分別では量ることのできない世界との出遇いである。この阿難における出遇いの出来事が、万人に開かれていることを親鸞は本願のはたらきに見たとと言える。「行巻」以下が本願を掲げて述べられる所以である。この視点に立って、まずは救済の法則として大行を見たのが次の第三章である。

第三章「救済の法―本願力廻向の仏道―」では、如来の廻向によって誰の上にも平等に救済が成立する仏道について考察した。その際、まずは『浄土論』において五念門の第五にある廻向門が、『浄土論註』を通して、本願力のはたらきとして押さえられることを確かめた。その上で、曇鸞が廻向について往相と還相の二種を立てたことの意味を尋ね、それが親鸞に至って如来の二種廻向として継承されていることを述べた。さらに、如来の二種廻向が「信巻」の欲生釈にまとめて引用されていることに注意し、如来の廻向は具体的には衆生を招喚する勅命にあることを考察した。如来の勅命は南無阿弥陀仏の名号となつて衆生にはたらきかける。それを最後に名号に現前する廻向という視点から考察した。

第四章「救済の機―金剛心の行人―」では、救済の機としての真実信心について、まずは考察した。親鸞における信心は本願成就の一心と見定めることができ、その一心が第十八願の文に出る「至心」「信樂」「欲生」の三心の内実をもっている。なぜ一心が三心をもつて確かめられるのか、それを三心一心の問答を通して尋ねた。その上で、一心が如来の願心の廻向成就であるが故に、どのような状況においても仏道を歩み続けることが成り立つ金剛心であると語られることの意味を考察した。また、真実信心に始まる生き方が「金剛心の行人」と言われる意義についても考察した。それを親鸞は「真仏弟子」と語るが、その具体的な姿を、「信巻」に長く引用される『涅槃経』が語る阿闍世の物語に尋ねた。

第五章「救済の利益―願生浄土の生―」では、「証巻」が語る往生についてまず尋ねた。その際、『浄土論』および『浄土論註』において、浄土が「莊嚴功德」として述べられることに注意した。どこかに固定的にある場所

ではなく、現実の人生にはたらく浄土について考察した。また、「証巻」は真実信心による浄土往生の内容について語りながら、同時に仏教が究極的課題にしてきた無上涅槃に到るということを述べている。そこには、真に仏道成就の課題に応答するのは、浄土の仏道しかないという親鸞の確信がある。「証巻」の中に還相廻向釈が展開されるのは、往生浄土が単に浄土に向かうという一方向ではなく、この世において仏道を歩むという仕事利益として与えられることを物語っている。この視点に立って、念仏往生の道が念仏成仏の道であることを確かめた。そして、念仏成仏の道を歩むことがどのようなことであるか、それを「願生浄土」という言葉を通して尋ねた。

今回は衆生に実現する救済に視点に立って『教行信証』を見るという切り口から考察した。『教行信証』全体を見渡せたとはいえなくても言えない。ただ、教えに出遇うところにどんな人間が誕生するのか、仏の教えは人間に何をもたらすのかということを中心にして、『教行信証』の流れをたどることはできたと思う。特に、『教行信証』の柱である往還の二種廻向について、『教行信証』の説示の次第に沿いながら、如来の二種廻向が現実を生きる人間の生き方に関わっていることを述べた。

衆生の上にかかる救済の事実という面に絞り、前四巻を中心に考察したため、「真仏土」「化身土」という仏土の巻に立ち入ることはできなかった。これについては今後の更なる課題としたい。

目次は以下の通りである。

序 真実の仏道

第一章 浄土真宗開顕―浄土の救い―

第一節 浄土真宗との出遇い

第二節 専修念仏弾圧

第三節 『教行信証』撰述の願い

第二章	救済の事実―顕真実教の明証―
第一節	真実の教え
第二節	如来出世の本意
第三節	値仏の難
第三章	救済の法―本願力廻向の仏道―
第一節	廻向の系譜
第二節	如来廻向
第三節	二種廻向のはたらき
第四節	二つの勅命
第五節	名号に現前する廻向
第四章	救済の機―金剛心の行人―
第一節	本願成就の一心
第二節	三心一心の問答
第三節	真の仏弟子
第四節	阿闍世の救済
第五章	救済の利益―願生浄土の生―
第一節	功德としての浄土
第二節	念仏成仏
第三節	浄土を願ってこの世を生きる

結